鈴木 博之（2023）『言語記述論集』15：75-84

[書評] 宋成、謝穎瑩、李大勤、李佐文（著）《西藏察隅松林語》
北京：商務印書館、2019 年、10+272pp.

鈴木 博之
京都大学
キーワード：チベット・ビルマ諸語、チベット系諸言語、言語識別、記述文法

1　本書の構成

本書は中国チベット自治区察隅県で話される松林語[1]についての、初めてのまとまった文法記述である。松林語は本書が初めて独立した言語と認めた。同言語はこれまでほぼ未記述であったこと、および母語話者の認識においてチベット系諸言語（中国の言語学における枠組みでは「チベット語」）の 1 方言とみなされていたこと、また昨今の社会情勢から消滅の危機に瀕する言語に分類されることから、その記述が急務であった。本書のもとは、中国で行われたプロジェクト《中国語言資源保護工程》の第 1 期の対象に選定され行われた著者のフィールドワークの成果である。本書は以下に示す 6 章に分かれ、続いて参考文献、調査手記、あとがきが加わる。

1. 序論
2. 音声、音韻
3. 語彙
4. 分類語彙表
5. 文法
6. 言語資料

本書は《中国語言資源保護工程》の成果を基本としているため、精密な文法記述よりも、資料として用いることができる語彙、文例、語りの書き起こしに当てられている。評者も同プロジェクトの別言語の記述にたずさわったこともあり[2]、チベット・ビルマ語用の調査票も手にし

[1] この言語名は地名に基づく。言語名は当該言語の原語音による自称または話される地域名に基づくのが望ましい（Suzuki 2022）が、評者はその詳細を知ることができない。民族名の自称は pø^{31}zɻ^{55} である（p. 91）が、これはチベット文語形式の *bod rigs*「チベット族」と対応するため、言語名に拡張するのは適切でない。「松林」という音形について、漢語であるのか松林語の漢字音写であるのか現段階では明らかでない。このため、言語名を暫定的に漢字表記のままとする。ただし、読みとしては「ソンリン」が、欧文環境では漢字音のピンイン表記 Songlin とするのが妥当と考える。一方で、本書は「松林村」の松林語による自称を sɑŋ^{31}lin^{55} と記し（p. 6）、「サンリン」のほうがふさわしい可能性がある。なお、「松林語」の自称は sɑŋ^{31}lin^{55}pu^{55}lo^{31}ɟe^{55} といい、最後の 2 音節はチベット文語 *logs skad* と対応するものと見積もられる。*logs skad* という語が自称に現れる場合、指示対象が「チベット文化圏で通用性の限りなく低い言語」という客観的かつ中立的な意味としてとらえられていると考えてよい（Suzuki & Sonam Wangmo 2016, Suzuki 2022）。そしてその指示対象が言語学的には非チベット系言語となることが多い点も注目に値する。

[2] 評者は 2018 年に四川丹巴二十四村話（カムチベット語 Rongbrag 方言群に属する sProsnang 方言）の記述に参与した（課題番号 YB1912A008；研究代表者：劉潔）。

たことがあるため、本書の構成および記述方法については理解できる。ただし、調査票だけでは本書のような文法を記述することはできず、著者の個別の努力が反映されていると判断できる。

本書評では、主に本書の記述言語学的成果の部分について紹介し、全般的な問題点を提起しつつ評者の考えを合わせて述べていく。

2　松林語の地位について

著者は松林語の地位について、チベット系諸言語（中国でいう〈藏語方言〉[3]「チベット語方言[4]」）ではないことを確認したうえで、〈藏語支〉に属する独立した言語という見解を提出している（pp. 5–9）。これは、評者の用語（Tournadre & Suzuki 2022）で言い換えれば、Tibetic ではないが Bodish に属するというように解釈できる。評者は、独立した言語であるという見立てを評価するが、その根拠となる議論は極めて不十分であり、それが中国で行われるチベット語方言学を援用したもののみであるため、説得力を欠いている。

著者は語彙形式を 2000 余語記録しているにもかかわらず、それを適切に評価する手段を用いていない。評者は著者の見解には賛同するが、最低限歴史言語学の比較方法にのっとって、すでに公開されている STEDT などのデータベースなどを利用して、適切な語形式の祖形との対応関係と音変化の規則という視点から結論を導くべきであったといえる。

試みに、松林語がチベット系諸言語の 1 つとみなしがたい語彙的特徴について、Tournadre & Suzuki (2022) を参考に考える。チベット系諸言語には、同系言語にのみほぼ共有される、祖形（proto-Tibetic）にさかのぼりうる語形式がある。このことは Beyer (1992:7-8) などにも指摘がある。表 1 は、そのような語について、語義、チベット文語形式[5]（以下「蔵文」）、松林語（本書から引用）、松林語の形式に対応するチベット・ビルマ祖語形式（以下 PTB；STEDT による）を対照したものである。

表 1　チベット系諸言語を特徴づける語形式と松林語；PTB を添えて

語義	蔵文	松林語	PTB
7	*bdun*	ɲ̊in^{24}	*s-ni-s (#2505)
２人称代名詞単数	*khyod*	nu^{55} / ɳu^{55}	*na-ŋ (#2489)
馬	*rta*	nbʐɑŋ^{24}	*s/m-raŋ (#1431)
血	*khrag*	ɕi^{55}	*s-hywəy-t (#230)

以上の蔵文形式に対応する口語形式がほぼチベット系諸言語にのみ現れる形式であるというのは経験則であるが、松林語でいずれも蔵文形式に一致しない点を見て、すべてが非チベット

[3] 本書評では、固有名詞を除く漢語の術語・用語を〈　〉でくくって示す。

[4] 評者は「チベット語方言」という呼称を非常に制限的な文脈でのみ用い、各種先行研究にある「チベット語（諸）方言（Tibetan dialects）」という表現は「チベット系諸言語（Tibetic languages）」と呼称する。詳細は Tournadre (2014)、Suzuki (2022)、Tournadre & Suzuki (2022) を参照。

[5] チベット文語形式のローマ字転写は de Nebesky-Wojkowitz (1956) に基づく。

系借用語で置き換えられた蓋然性は低いと言える。このため、表 1 のデータは松林語をチベット系諸言語に属さない言語の 1 つと考える根拠とすることができる。この手法は Tashi Nyima & Suzuki (2019) でラモ語の識別を行うときにも参考としたものである。

以上の点から、松林語がチベット系諸言語とは異なる言語であるという本書の主張は支持できる。しかし本書は、松林語が非チベット系の独立の言語であるとする一方で、同言語の所属を〈藏語支〉としている。評者はこの主張には首肯しがたい。中国の言語学が考える〈藏語支〉とは、英語 Bodish という用語で呼ばれる、チベット系諸言語と East Bodish を含む言語群に相当するものと考えられる[6]。本書では、〈藏語支〉に基づくという見方を孫宏開 (2004) の考えに基づいて判断しているだけで、言語事実を検討したうえでの結論ではなく、また、その過程は本書に示されていない（p. 7）。少なくとも Bodish に属する非チベット系諸言語との関係を具体例に基づいて対照し、歴史言語学的考察をしてはじめて確定的な意見が提出できるものである。読者はこの点に気をつけて本書を利用する必要がある。

3　本書の記述研究の検討

本書の中核をなす記述研究について、本書の順序にしたがって、音声・音韻、語彙、文法について分けて評していく。

3.1　音声・音韻について

松林語の音体系は、中国の言語学で採用される〈声韻調〉という３要素に分け、最後に音節構造を記述している（pp. 18-26）。以下、評者の目から見て注目できる特徴をいくつか紹介しておく。

本書のいう声母すなわち音節初頭の子音体系について注目すべき点として、以下のようなものがある。

- 前部硬口蓋閉鎖音（ʈ類）、前部硬口蓋破擦音（tɕ類）、硬口蓋閉鎖音（c類）の対立
  ʈ類と c 類が対立する言語は報告が非常に少ない。中国の音標文字システムに文字は登録されている（朱曉農 2010）が、特に ʈ 類が記述に現れる事例は少数である。チベット系諸言語については、カムチベット語 Lamdo（浪都）方言（鈴木 2010）や dNgo 方言（鈴木 2017）などに見られる。この点について、チベット言語学の枠組みにおける音表記の重要性を Suzuki (2016) が取り上げている。とはいえ、これらの音の分布は音環境による偏りがあるようにも見えることから、同言語・借用語などを対照し、それぞれの音素が他言語のどの音素と対応関係を持つかを分析できるとよいだろう。
- 子音連続の３つのタイプ

[6] Bodish という用語は複数の研究者が異なる定義で用いている。評者の定義は、ここに示したように、チベット系諸言語と East Bodish という最小限の構成要素からなるものと定義する。なお、East Bodish については、Hyslop (2022) を参照。なお、評者は〈藏語支〉という用語を Tibetic の意味で用いる（鈴木 等 2022）。

前鼻音、/ʐ/のわたり音、両者の複合という３種類がある。著者が明記するように、/ʐ/は音声実現として [ʐ] であって、[r, ɹ] ではない（p. 19）。チベット系借用語を見る限り、多くの例でわたり音/ʐ/は蔵文下接字 r との関連が認められ、r 音との関連が認められる。カムチベット語でも、蔵文 r に対応する音を/ʐ/と記述する例がある（格桑居冕 1985）。この差異は記述者によることが、STEDT[7] などの多言語データベースにある表記上のゆれ[8] からも理解できる。本書における/ʐ/の使用は音声実現を重視した記述であるといえるが、有気音に続く場合、当該音素がなお有声音として実現されるかどうかは気になる点である。

母音＋末子音体系について注目すべき点として、以下のようなものがある。

- 広母音は/ɑ/のみ
  松林語には/a/が認められず、/ɑ/のみが音体系にある。音節のどの位置に現れても後舌で調音されるということになるが、中舌 [ʌ] という可能性があるかどうかは気になる点である。もしすべての音環境で後舌となるならば、チベット・ビルマ系言語としては際立つ特徴といえる。
- 摩擦性母音に非円唇と円唇がある
  摩擦性母音として/ɿ/と/ʅ/の２種が認められる。これらは音声実現として初頭子音が非そり舌かそり舌かという環境変異を見せ、それぞれ [ɿ, ʅ] と [ʅ, ʅ] を見せるとする。一方、著者は/ɿ/が音素である根拠に/i/との対立を挙げている（p. 22）が、/ə/とは最小対を構成するように見えない。この点について説明があればなおよかったと思われる。
- 鼻母音は音韻的でなく、末子音に鼻音 n, ŋ を認める
  著者は鼻母音の音声実現が認められるとしつつも、鼻音末子音をもつ例との対立が見られないことなどを考え、鼻音末子音として処理できると考えている。一方で、現在の松林語が鼻音末子音から鼻母音へと変化しつつある状況にあると解釈できるとする。共時的に解決するのは難しい問題であり、長期間の観察を通して現状の解釈が妥当であるかが検証できるといえる。

声調体系について注目すべき点として、以下のようなものがある。

- 音節声調で、３つの対立がある
  本書の分析では、音節ごとに声調を認め、55、24、31 の３種が対立することになっている。注意すべきは複音節語の構成要素になったとき変調することがあるという指摘（p. 24）で、変化しないか 33 か 31 と記述する。チベット系諸言語の分析を見ると、中国では音節声調、それ以外の記述では語声調の分析がとられている。このため、語声調の可

[7] 参照 URL: https://stedt.berkeley.edu/

[8] この「ゆれ」が方言差であるか個人差であるか、それとも記述者の好みであるのかは、データベースからは分からない。松林語の文脈でいうと、近隣で話されるイドゥ語（江荻 2005）、クマン語（李大勤 2002）、ザクリン語（劉潔 2021）でわたり音位置の当該音をそれぞれ/ɹ/, /r/, /r/と記述している。

能性もあるのではないかと見える。

- 疑問詞に特有の声調パターン
  本書では 42 という声調が疑問詞、疑問文、願望文で現れると指摘する（p. 24）。特定の文の形式に現れることから、語に備わった声調ではなくイントネーションなど韻律的特徴と判断でき、語の記述には適用しない著者の判断は正当であるといえる。
- 31 調の現れ
  本書では声調に文法的機能があると述べ（p. 25）、31 調が主に機能語に現れるという観察を提示している。一方で格標識は 55 調で固定されているということで、特徴的である。31 調は自立語にも現れるというが、著者の挙げる例（p. 25）を見ると、２音節語の初頭音節と 4 音節語の第３・4 音節に現れる例のみで、これだけを見ると、チベット系諸言語の語声調の類型を想起させる。この点から見ても、語声調という枠組みで再考する必要性があると言える。

なお、本書は松林語のローマ字表記を提案している（pp. 30-33）。ただし、当該箇所を除いて、このローマ字表記は実践されていない。本書が言語学の研究者向けと考えられているからであろうか。現地への還元としては、語彙や長編資料の部分についてはローマ字表記を併記するなどの工夫があってもよかったのではないかといえる。

3.2　語彙について

《中国語言資源保護工程》の調査票の大部分は語彙に当てられている。本書では第３章で松林語の語彙体系を概観し、派生についてもまとめている。続いて第 4 章では、調査票の順序に基づいた松林語の語彙リストを掲載している。配列は意味グループにより、「天文地理」「時間・方位」「植物」「動物」「建物・器具」「服飾・飲食」「身体・医療」「冠婚葬祭・信仰」「人物」「農工商文化」「動作・行為」「性質・状態」「数量」「代名詞・副詞・機能語・接続詞」の順である。多くの記述研究では、語彙リストを巻末に配置する傾向にあるが、本書の基本理念が《中国語言資源保護工程》の成果発表であることを考えると、この順序に違和感はない。しかしながら、語彙は基礎語彙、調査票にあるその他の語彙、そして松林語のために必要な補足語彙の３種類に分けられ、かつ重なって収録されていないのは、語彙資料を利用する側から見れば非常に不親切である。加えて、索引がないため、配列を頭に入れておかなければ語形の検索には不便である。こういった点で、本書は参照を第一目的として作成されているわけではないということを心得ておかなければならない。

語彙形式については、第３章に借用語や同源語の解説があるものの、語彙資料中に語源が示されているわけではない。また、著者はチベット系借用語と本来語に違いがあることを認識してはいるが、その来歴となるチベット系借用語の性質、すなわち地方（方言）語彙であるか文語読書音であるかについて注意を払っていないか、それを分析するだけの資料を持ち合わせていないおそれがある。たとえば、「狼」という語について、ɕoŋ^{55}khu^{55} を松林語に固有の形式、tɕɑŋ^{55}ku^{55} をチベット系借用語と記述する（p. 40）。しかし、いずれもチベット系借用語で、蔵

文 *spyang khu* に対応する形式である。前者が地方語彙からの借用、後者がラサのチベット語もしくは文語読書音に由来すると考えるのが通例の判断であろう。後者の獲得は、おそらくラジオ・テレビなどの音声メディアでラサのチベット語（もしくは *spyi skad* と呼ばれる共通語）に触れたことによる、最近の現象であると考えられる。このようなこともあり、本書の語形式からチベット系借用語を丁寧に分析し、その借用経路を検証することは、今後の課題の 1 つになると言ってよい。

本書では一部ではあるがカラー印刷が採用され、これまでに中国で出版された記述文法や語彙集と一線を画す。この特徴を利用して、松林語の分布地域に特有のものについてカラー写真を使用して解説しているのは新しい試みであり、非常に役立つ。残念なのは写真と解説のバランスおよび紙幅の制限で、もう少しレイアウトを工夫し体系的に写真を配置すれば、語彙集としてよりよいものとなるだけでなく、記録言語学的にも効果的な成果報告となるだろう。特定の分野について体系的な語彙集は星ほか (2020) がよい手本となるといえる。

3.3　文法について

《中国語言資源保護工程》の調査票では、収集すべき文例は 100 文のみであり、これだけでは文法の概要すら明らかにできない分量である。このため、本書の記述を完成させるために、著者は調査票以外に追加で調査したものと判断できる。記述方法は中国で出版されてきた類似の記述研究シリーズである《語言簡誌》《新發現語言研究叢書》のものに近いと判断される。

記述の構造は大きく「語類」「句」「文」に分かれる。「語類」についての記述が最も多く、11 項目に分けて記述している。最後には〈附加成分〉（機能語）がまとまっており、名詞句につく格標識と動詞句につくアスペクト標識・証拠性標識についてまとめて記述がある。このように、「語類」に分けてしまうと、機能語の扱いが体系的に記述できない。むしろ名詞句と動詞句を別個にまとめて、各構成成分の配置関係を記述するほうが、文法記述としてより分かりやすい構造となるだろう。

名詞の記述について際立つのは、数範疇の記述が詳細な点である（pp. 117-119）。まず、名詞には可算・不可算の別があり、可算のものはさらに単数・複数に分かれる。複数にも 2 つあり、曖昧複数と非曖昧複数となる。特に最後の分類は評者のチベット系諸言語に対する数の概念と合致し、松林語には特に「双数」という概念がなく、非曖昧複数の下に分類されるものであると明記している（p. 119）。この記述は他言語にも応用可能であり、模範となりうる。

数詞については、（pp. 125-127）で松林語とチベット系諸言語の形式が対比されている。記述文法であれば、この作業を当該箇所で行う必要性はなく、第 1 章で議論すればよく、バランスを欠いている[9]。

数量詞については、名詞と結合するものと動詞と結合するものの 2 種を記述する。度量衡も

[9] 加えて、該当箇所に引用してあるチベット系諸言語（Lhasa、Chamdo、bLabrang）の資料には現実的ではない音が記述されており、残念ながら精確とは言いがたい。《中国語言資源保護工程》の成果というが、このような資料は引用するよりは、むしろ先行研究の出版物から記述を採用したほうがよかったと考える。

数量詞としてふるまう部分があり、ここで記述している。また、この中でも、「対」を表す tɕhɑ^{55} について非文法的となる例を記述しているのが目立つ（p. 131）。この情報は簡潔であるが、類型論的には重要な点を押さえていると言えるだろう。

代名詞については、人称代名詞、指示代名詞、再帰代名詞、疑問代名詞、不定代名詞に分けて記述している。人称代名詞には双数が設けられている（pp. 134-135）が、数詞の「二」と関連する語形を用いるなどの点を見ると、他の数詞との組み合わせはないのかと疑問になる。名詞の数範疇で双数の独立性を否定しているため、なおさら知りたいところである。再帰代名詞については、代名詞の範疇で詳しく例示されている（pp. 137-140）。

動詞については、語類における記述としては簡潔である（pp. 147-151）。動詞の分類を自動詞・他動詞、自主動詞・非自主動詞、自発動詞・使役動詞、行為動詞・可能願望動詞、判断動詞、存在動詞、助動詞の７つの視点から行っている。このうち、自主動詞・非自主動詞は英語の用語の controllable / non-controllable に対応するものと考えられ、意思 volitional・非意思 non-volitional を採用していないのは注目できる。また、松林語には厳密な意味での判断動詞（狭義での繋辞動詞）が存在しないことを記述している（p. 149）。これは語形が存在しないというよりは同カテゴリーが存在しないというように理解できる。当該箇所には ʐɛ^{24} が記述されている[10]が、第６章の例文を見ると、小辞とされる noŋ^{31} も繋辞の機能があるように見える（たとえば pp. 191-193 の例文 010, 020, 027）。ただし、著者は後の文を扱う節で述べているように（p. 182）、noŋ^{31} で名詞句が結ばれる文を名詞文と解釈している。

形容詞については、用法、程度の表現、名詞化について述べている。名詞を修飾する場合、形容詞は名詞に後置され、また述語にもなれる。形容詞自体の語形変化は認められず、重複が見られる程度である。形容詞の名詞化は話題標識によって構成されることが記述されているが、名詞化については別途まとめたほうがバランスがよかったかもしれない。

副詞については、その意味によって７種の下位分類を設けて記述している。なお、本書では否定の要素を副詞として記述する（p. 156）。否定副詞の現れは、チベット系借用語で複数音節の動詞の場合、チベット系のもともとの構造を維持していることが例示されている。ただし、著者はそれについて触れていない。

間投詞については、主要な語形を挙げたうえで、用例を掲げている。このような提示の方法は、間投詞の具体的な使用方法の理解を助けるものであり、必要な作業といえる。

擬音語については、独立に節を設けて、間投詞と同じように主要な語形を挙げたうえで、用例を掲げている。ここでいう擬音語は、自然界のさまざまな音をまねて発話するものに限っている。このほかに擬態語があるかどうかは記述がない。

語気詞については、３つの形態について記述がある。このうち、１つめの語形 nəŋ^{31} (noŋ^{31}) については、先にも述べたように、繋辞としての機能が認められ、それを著者は「陳述の語気」

[10] この ʐɛ^{24} という形式は、チベット文語形式 *red* と対応する可能性が高く見える。判断動詞の中で陳述の証拠性の機能を持つ語幹である。松林語のチベット系借用語の借用経路については別途詳細な研究が必要であるが、松林語の分布域の近隣で話されるチベット系諸言語には *red* と対応する語形式が用いられている（鈴木 2012, 2021）。

と呼ぶ。しかし、先行する形容詞の記述の際の例文（p.152）では述語として持続のアスペクト標識と並行して用いられるのが記述されている。すると、この要素自体が次の項目である付加成分の１つに位置づけられるのではないかと疑問を抱かせる。

付加成分（機能語）については、記述の分量が豊富である（pp. 161-170）が、これまでの品詞別の記述に比べて記述対象が多すぎるように見える。まず名詞類への付加成分、すなわち格標識と話題標識がまとめられている（pp. 161-165）が、すべての標識を独立して扱い、文法格・位置格の分類など、格体系を示していないのは残念である。続いて述語への付加成分、すなわちアスペクト標識と証拠性標識がまとめられている（pp. 166-170）が、やはりアスペクトと証拠性という異なる要素をまとめて記述している点は分かりにくい。いずれの記述も、各標識が表しうる体系としての全体像をまとめた表などがあれば、参照しやすい。なお、本書は証拠性について引用 (reported) と視認 (visual) の２つを挙げているが、語気詞の項で述べたように、「陳述」もまた証拠性の１つとするという考え方（Tournadre & LaPolla 2014）があることにも注意すれば、異なる分析が可能であろう。チベット文化圏に分布する言語という観点から見れば、証拠性が体系化しているかどうかに関心が向く。残念ながら、本書はその関心に応えられる記述は提供されていない。それは著者の興味とともにチベット系諸言語の知識にもよるため仕方のないことであるが、松林語のそばで話されるセク語（gSerkhu；本書の表記で〈素苦語〉、評者は〈色庫語〉を用いる）はラモ語と姉妹関係にあり、ラモ語にはカムチベット語の証拠性に酷似する体系[11]を備えていることが分かっている（Suzuki & Tashi Nyima 2021）。この点を詳細に分析すれば、松林語とセク語の関係もまた議論でき、その所属問題に一石を投じることができるかもしれない。

語類に続いて、句と文の記述がある。句については、主に構造に基づく分類、機能における分類を行い、要領よく記述している（pp. 171-178）。文については、文の成分、単文、複文に分けて記述している（pp. 179-188）。文の成分の分類と記述には、漢語の文法範疇を適用している。句および文については、いずれも簡潔で的確な記述となっているが、もう少し語類との関連を持たせて記述すれば分かりやすいと言える。

3.4　言語資料について

本書には第６章として基本文例 100 文と自然発話（民謡歌詞１件；物語 10 件）が含まれている。記述言語学の資料として、このようなデータが付加されているのは歓迎できる。

採録された物語は、松林語がチベット文化圏に属することを示している。著者が意図的に選んだのか、採録できた中で、たとえば長さなど言語外の状況で調整したのかは不明であるが、物語だけでなく、神話や民族移動の口承など、種類に富む選択もありえたのではないか。ジャンルによって語り口の異なりが見られる可能性もある[12]。

[11] 興味深いことに、酷似するのは体系（枠組み）だけであり、語形はラモ語に独自である。

[12] たとえば、Suzuki & Sonam Wangmo (2021b) は歴史的な語りと民話の間において語り口と形態統語論的表現の間に異なりがあることを報告している。

なお、採録された物語の中で、チベット文化圏で共有される筋書きがあり、物語の伝播の視点から見ると興味深い。４つめの「羊と狼」（pp. 218-223）は Suzuki & Sonam Wangmo (2021a:e115-e124) の「羊と狼」に、５つめの「１人の “ラマ”」（pp. 223-226）は Zou & Suzuki (2022:24-37) の「野うさぎの知恵」に、それぞれプロットが酷似している。細かな設定に違いがあるものの、物語の筋は共通といえる。前者はカム（Lhagang；四川省甘孜州康定市）、後者はアムド（Cone；甘粛省甘南州卓尼県）に伝わる民話であるが、いずれも松林語の分布地域とは距離がある。口承文化の拡張について考えさせられるものであり、本書が資料として提供したことが重要な発見につながるかもしれない。

参考文献

鈴木博之 (2010)「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻 1 号 231-264. doi: https://doi.org/10.15021/00003898

鈴木博之 (2012)「カムチベット語 Sangdam 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 83 号 37-58. doi: https://doi.org/10.15026/69336

鈴木博之 (2017)「カムチベット語翁上 [dNgo] 方言の音体系に関する覚え書き」『ニダバ』第 46 号 35-43. URI: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045562

鈴木博之 (2021)「カムチベット語察瓦龍 [Tshawarong] 方言の音声記述と語彙」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 15 号 105-137. doi: https://doi.org/10.15026/99899

星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介 (2020)『チベット牧畜文化辞典（チベット語-日本語）』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　doi: https://doi.org/10.15026/94592

Beyer, Stephan V. (1992) *The Classical Tibetan language*. Albany: State University of New York.

Hyslop, Gwendolyn (2022) Kurtöp verbal morphology in the East Bodish context: A case study in ethnohistorical morphosyntax. In Mark W. Post, Stephen Morey and Toni Huber (eds) *Ethnolinguistic prehistory of the Eastern Himalaya*, 323-362. doi: https://doi.org/10.1163/9789004518049_013

de Nebesky-Wojkowitz, René (1956) *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. ’s-Gravenhage: Mouton.

STEDT = The Sino-Tibetan etymological dictionary and thesaurus. Database. Online: http://stedt.berkeley.edu/search/

Suzuki, Hiroyuki (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125. URI: http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/

Suzuki, Hiroyuki (2022) Glottonyms, identity, and language recognition in the eastern Tibetosphere. In Gerald Roche and Gwendolyn Hyslop (eds.) *Bordering Tibetan languages: Making and marking languages in transnational High Asia*, 105-125. Amsterdam: Amsterdam University Press. doi: http://doi.org/10.5117/9789463725040_CH05

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2016) Lhagang Choyu: A first look at its sociolinguistic status. *Studies in Asian Geolinguistics II—Rice—*, 60-69.
Online: https://publication.aa-ken.jp/sag2_rice_2016.pdf

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2021a) Two folktales in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: *The Sheep and the Wolf* and *The Hare and the Tiger*. *Tokyo University Linguistic Papers (eTULIP)* 43, e114-e142. doi: https://doi.org/10.15083/0002002787

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2021b) Hearsay evidential marking strategy in Lhagang Tibetan: A case study on folktales and legends. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 44.2, 141-167. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.21001.suz

Suzuki, Hiroyuki & Tashi Nyima (2021) Evidential system of copulative and existential verbs in Lamo. In Yasuhiko Nagano & Takumi Ikeda (eds) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages 4: Link languages and archetypes in Tibeto-Burman*, 259-287. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. URI: http://hdl.handle.net/2433/263981

Tashi Nyima & Hiroyuki Suzuki (2019) Newly recognised languages in Chamdo: Geography, culture, history, and language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42.1, 38-82. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.18004.nyi

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.37.2.04tou

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (2022) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelle for the cartography). Villejuif: LACITO Publications.

Zou, Yuxia (gYu-’brug-mtsho) & Hiroyuki Suzuki (2022) Five folktales in Bragkhoglung Tibetan of Cone. *Himalayan Linguistics* Archive 11, 1-85. doi: https://doi.org/10.5070/H90052025

江荻 (2005)《義都語研究》民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med] (1985)〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第２期 16-27.

李大勤 (2002)《格曼語研究》民族出版社

劉潔 (2021) 《西藏察隅松古扎話研究》中央民族大学博士論文

孫宏開 (2004)〈我對藏語支語言特點的初步認識〉《南開語言學刊》第２期 17-25.

鈴木博之 [Suzuki, Hiroyuki]、扎西尼瑪 [bKra-shis Nyi-ma]、才讓三周 [Tshe-ring bSam-grub]、四郎翁姆 [bSod-nams dBang-mo] (2022)〈昌都市内新認知語言的数詞結構〉《南開語言學刊》第１期 159-168.

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

受理日 2023 年 4 月 10 日